青森県埋蔵文化財調査報告書　第176集

森田(4)・(5)遺跡

平成６年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第176集

森田(4)・(5)遺跡

—県営津軽中部地区広域農道整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、平成５年度に津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い、建設予定地内に所在する弘前市森田(4)・(5)遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

今回の調査により、縄文時代の遺物や黒曜石を伴う遺構等が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも今後の文化財の保護および活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導賜りましたことに対して、心から感謝の意を表します。

平成７年３月

青森県教育委員会

教育長　佐々木　透

例　　言

1　本報告書は、平成５年度に津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い実施した弘前市森田(4)・(5)遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は、平成４年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号02177・02178として登録されている。

3　執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。

4　挿図の縮尺は、図ごとに示した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。

5　各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。

6　資料の分析、鑑定については、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

遺跡周辺の地形と地質	青森県立板柳高等学校教諭	山口　義伸
石器の石質鑑定	青森県埋蔵文化財調査センター主査	伊藤　昭雄

7　本書に掲載した地形図（遺跡の位置、周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１、５万分の１の地形図を複写したものである。

8　遺構内外の堆積土の注記は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄　1990）を用いた。

9　出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　発掘調査および本書の作成にあたり、次の方々から御教授・御指導をいただいた。(順不同、敬称略)。

小杉　　康、阿部　朝衛、服部　隆博、伊藤由美子

目　　次

序
例　言
目　次
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項……1
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査要項……1
第Ⅱ章　調査方法と調査の経過……4
第１節　調査方法……4
第２節　調査の経過……4
第Ⅲ章　遺跡の環境……7
第１節　遺跡周辺の地形及び地質……7
第２節　周辺の遺跡……13
第Ⅳ章　森田(4)遺跡……14
第１節　検出遺構と出土遺物……14
1　土坑……14
第２節　遺構外出土遺物……15
1　土器……15
2　石器……17
第Ⅴ章　森田(5)遺跡……18
第１節　検出遺構と出土遺物……18
1　土坑……18
2　掘立柱建物跡……20
第２節　遺構外出土遺物……23
1　土器……23
2　石器……23
3　近世～現代の陶磁器……29
第Ⅵ章　小結……30
第Ⅶ章　まとめ……31
引用・参考文献……31
写真図版
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

昭和57年、青森県農林部は弘前市から西津軽郡鰺ヶ沢町に至る津軽中部地区広域営農団地農道を建設する計画を明らかにした。これを受けて、県教育委員会では計画路線に係る埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。その結果、弘前市管内には本遺跡を含めて独孤、荼毘館、草薙、湯ヶ森、十腰内、尾上山、鬼沢猿沢の８遺跡、鰺ヶ沢町管内には４遺跡の所在が確認された。

これらの埋蔵文化財包蔵地の保護のために協議を重ねたが、路線ルートの変更は困難であるとの結論に達した。そこで、造成工事着工前に記録保存のため発掘調査を実施することとなったのである。

昭和58，59年度に独孤、昭和60，61年度に荼毘館、昭和62，63年度に鰺ヶ沢町杢沢、平成元年度に尾上山(2)・(3)、鬼沢猿沢遺跡の発掘調査が行われている。

第２節　調査要項

１　調査目的

津軽中部地区広域営農団地農道事業の実施に先立ち、当該地区に所在する森田(4)・(5)遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間

森田(5)遺跡　　平成５年９月１日から同年９月30日まで

森田(4)遺跡　　平成５年10月１日から同年10月29日まで

３　遺跡名及び所在地

森田(5)遺跡　　弘前市大字十面沢字森田８－４番地、外

森田(4)遺跡　　弘前市大字十面沢字森田17－７番地、外

４　調査対象面積

森田(5)遺跡　　1,024平方メートル

森田(4)遺跡　　1,348平方メートル

5　調査委託者

青森県農林部

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

弘前市教育委員会、中南教育事務所

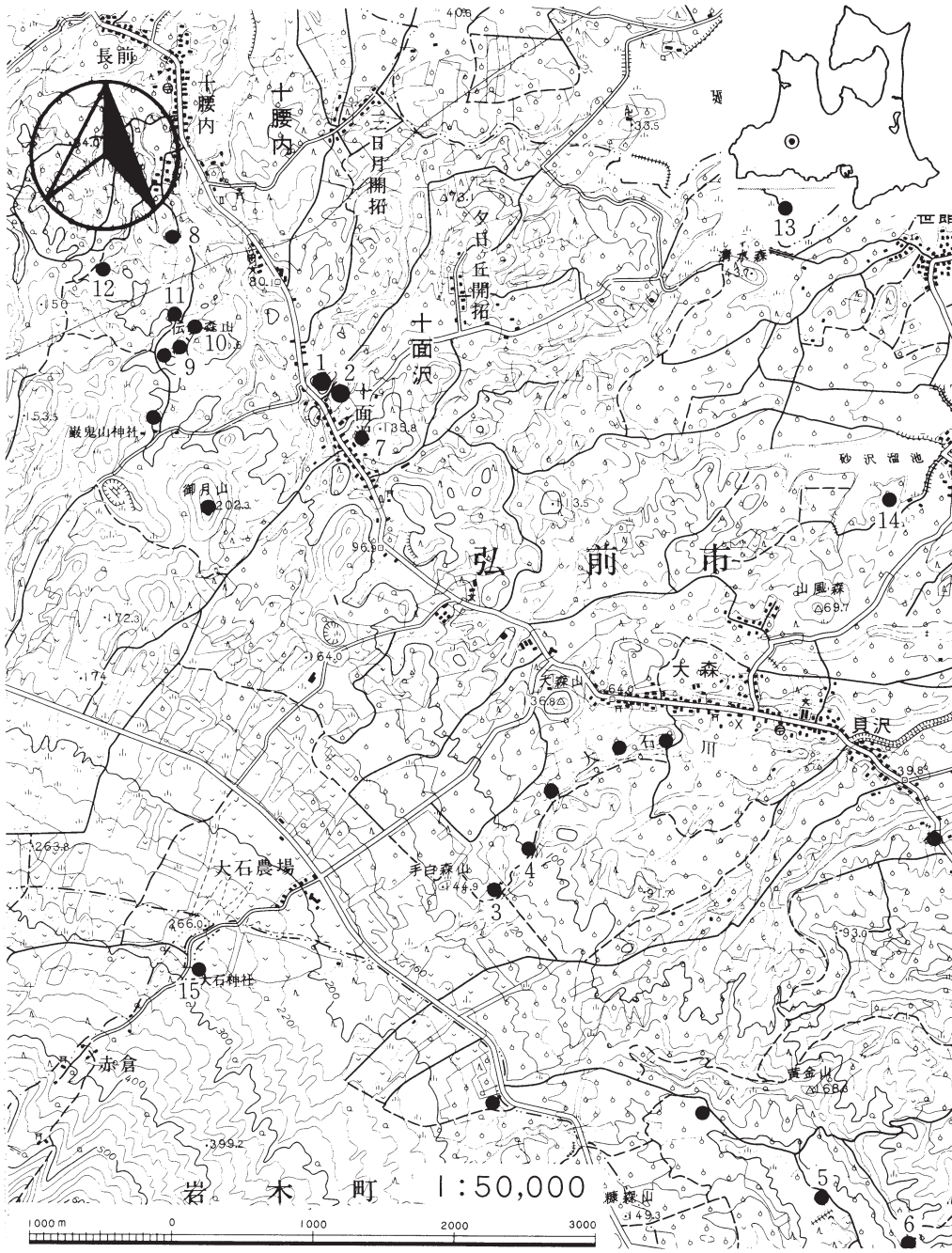
9　調査参加者

調査指導員	村越　　潔	弘前大学教授	（考古学）
調査協力員	佐藤圭一郎	弘前市教育委員会教育長	
調　査　員	小山　陽造	八戸工業高等専門学校教授	（分析化学）
	高島　成侑	八戸工業大学教授	（建築史）
	市川　金丸	青森県立郷土館学芸課課長補佐	（考古学）
	山口　義伸	青森県立板柳高等学校教諭	（地質学）
	赤平　智尚	青森県立柏木農業高等学校教諭	（考古学）

調査担当者　　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課	課　　長	三浦　圭介
	主　　事	笹森　一朗
	主　　事	斎藤　　岳
	調査補助員	斎藤　　勝、堀内万里子、伊藤　弘子

（笹森　一朗）



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	森田(4)遺跡	縄文	6	鬼沢猿沢遺跡	縄文(後・晩)	11	十腰内遺跡	縄文(後・晩)
2	森田(5)遺跡	縄文	7	常夜森遺跡	縄文	12	甕子山遺跡	縄文
3	大森勝山遺跡	縄文(前・後・晩)	8	猿沢(1)遺跡	縄文	13	清水森遺跡	縄文(中・後・晩)
4	手白森遺跡	縄文	9	猿沢(2)遺跡	縄文(後・晩)	14	砂沢遺跡	縄文(後・晩),弥生
5	尾上山遺跡	縄文	10	伝次森山遺跡	縄文	15	大石神社遺跡	縄文

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　調査方法と調査の経過

第１節　調査方法

グリッドの設定は、遺跡内の道路建設用中心杭No.795を基準としてＱ－12と称した。この点を基準に磁北方向に南北方向の基準線を設定し、森田(4)遺跡を含めた調査区全体に４ｍ×４ｍのメッシュを組んだ。グリッド番号は南北ラインを南から北へ１から39までの算用数字、東西ラインは東から西へアルファベットＡからＺおよび片仮名アからヒまでを付して用い、グリッドの名称は北西隅の交点を使用することとした。

測量原点は、道路建設用地脇にある工事用測量原点からレベル移動を行い、両調査区域内に数箇所設置した。

調査は森田(5)遺跡では、１グリッド毎に数地点を掘り下げ順次拡幅していった。また、遺構の検出されなかった調査区際のグリッド数箇所を深掘りし、土層の堆積状態を観察した。森田(4)遺跡では、排土置き場が確保できなかったため、１グリッド毎に数地点を掘り下げ、遺構を検出した場合は周辺を拡げることとし、遺構が検出されなかった場合は埋め戻しながら、掘り進めていくこととした。

遺構の調査は、確認順に番号を付して精査した後、二分法・四分法を用いた。遺構内出土遺物は必要に応じてポイント、レベルを記入した。実測は遣り方測量を用い縮尺は20分の１を原則とし、必要に応じて10分の１の縮尺を用いた。包含層出土遺物については、グリッド毎に層位を確認しながら取り上げた。写真撮影は、35㎜のモノクローム、カラーリバーサルの２種類のフィルムを使用して、作業の進展にともない必要に応じて行った。

第２節　調査の経過

平成５年７月15日、発掘調査関係機関の担当者、調査指導員、調査員等の出席のもとに発掘調査の事前打合せ会議を開催した。

湯舟(1)・(2)遺跡の調査終了を受けて、９月１日、森田(5)遺跡調査区内の環境整備を行うと共にグリッド設定を行い、設定区域から順次掘り下げを開始した。また、排土置き場として利用する水田数箇所に深掘用のグリッドを設定して遺構の有無、土層の堆積状態を観察した。

Ⅰ層（耕作土）からは近世陶磁器片が少量出土している。調査区中央部はかなり削平を受けており遺物包含層の堆積は認められなかったが、それ以外の区域ではしっかりした包含層の堆積が認められた。しかし、遺物の出土量は比較的少なく、道路幅という限られた区域というこ

ともあり、遺構の検出数も土坑６基、掘立柱建物跡１棟にとどまった。

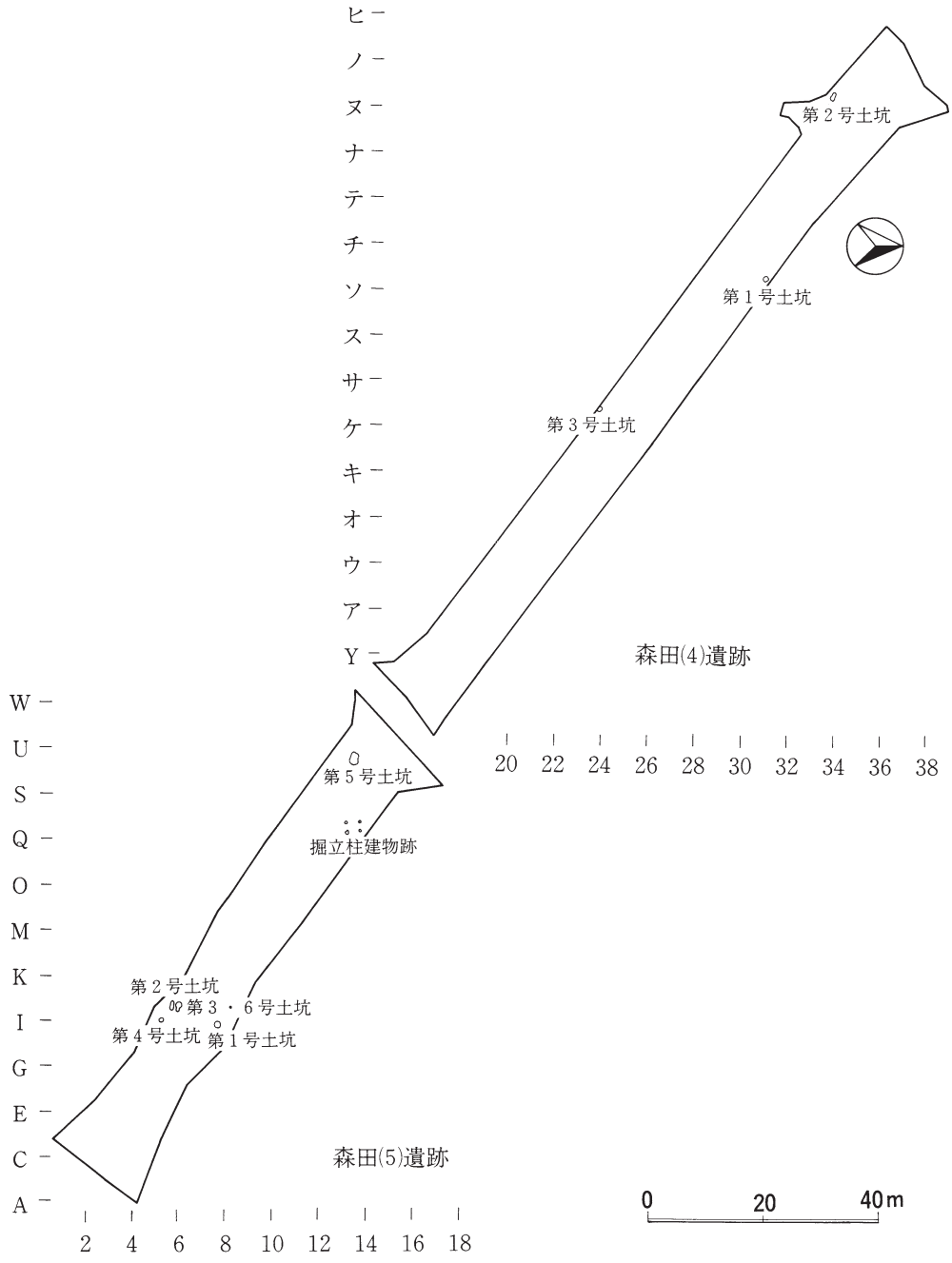
９月30日、遺構の精査終了後、地形コンタ測量を行い調査の全日程を終了し、ひきつづき、森田(4)遺跡の調査を10月１日より開始することとした。

10月１日、調査区内の環境整備を行うと共にグリッド設定を行い、設定区域から順次掘り下げを開始した。

Ⅰ層（耕作土）からの遺物の出土量も少なく、調査区東側は平坦ではあったが、かなり削平を受けており、包含層や検出された遺構も遺存状態はあまりよくなかった。調査区西側は緩斜面となっていたが、包含層は比較的厚い堆積が認められた。しかし、遺物の出土量、遺構の検出数ともに比較的少なかった。

10月29日、遺構の精査終了後、調査区全体の埋め戻しを完了し、調査の全日程を終了した。

（笹森　一朗）



第2図　森田(4)・(5)遺跡遺構配置図

第Ⅲ章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形と地質

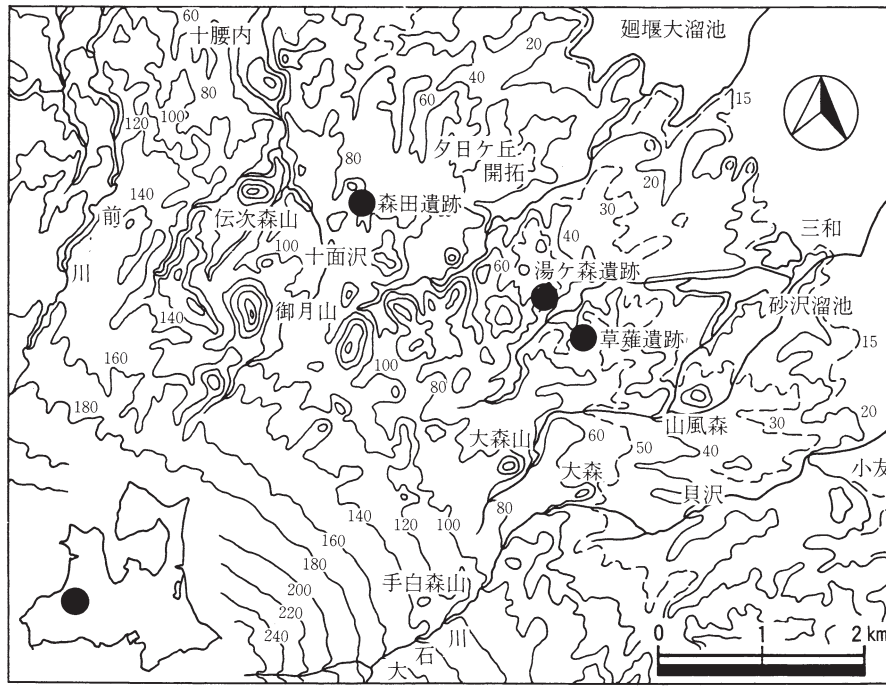
青森県立板柳高等学校教諭　山　口　義　伸

森田(4)及び同(5)遺跡は岩木山北東麓の十面沢付近に位置する。

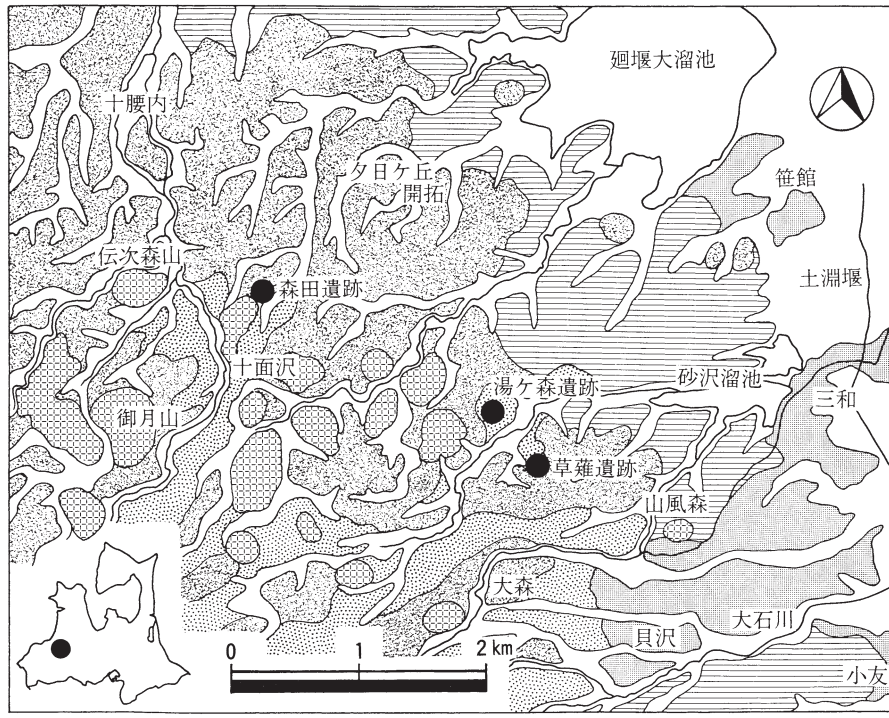
十面沢付近にみられる主な水系としては南方の大石川と北方の長前川であって、いずれも岩木山の放射河川である。大石川はその最上流部分が赤倉沢であって、谷頭付近（標高1300～1400ｍ）に展開する爆裂火口跡に源を発している。また、裾野には標高400～500ｍを扇頂部とする新期の山麓扇状地が展開し、その勾配は約100／1000とかなり急である。長前川は山頂北側に位置する扇ノ金目山に源を発し、ほぼ北流して下流に築造された小戸六溜池に注いでいる。長前川は西方の大鳴沢流域に展開する山麓扇状地と赤倉沢の扇状地との接合付近を流下している。この他、山麓扇状地内を流れる多くの浸食谷があって、津軽平野縁辺部に築造された小戸六溜池・廻堰大溜池・砂沢溜池などへ注いでいる。

岩木山北東麓の十面沢及び十腰内付近には伝次森山、御月山など円錐形をなす小丘群が点在している。いずれも比高90ｍ以下、直径500ｍ以下の小丘であって、十面沢円頂丘群と呼ばれている。この円頂丘群は輝石安山岩質の火砕岩及び溶岩からなり、「十腰内石」として採石されている。現岩木火山の噴火活動前の、いわば古岩木火山の一連の活動と考えられる（鈴木，1972)。ただ、これらの小丘群については赤倉沢から流出した泥流堆積物によって形成された泥流丘群とする見解もある（一色・大沢，1967)。

また、岩木山南麓から東麓にかけては杉沢森（148.5ｍ）・高長根山（172.0ｍ）・黄金山（168.3ｍ）などを連ねた弧状の丘陵地が展開している。この弧状の丘陵地は火山体側の相対的な沈下によって形成されたものであり、丘陵地の火山体側には断層崖が認められる（鈴木，1972)。ただ、十面沢及び十腰内付近には段丘崖で接するような丘陵地は認められない。むしろ、十面沢円頂丘群とその周辺を被覆する形で分布する開析された山麓扇状地が展開している。岩木山北東麓においては少なくとも新旧２つの山麓扇状地面を確認することができた。上述のように、新期山麓扇状地は古期のものより上流側に位置し、勾配が大きく面の開析度が小さい。裾野の標高100～150ｍまで典型的に分布している。それ以下の高度にあっては、大石川など浸食谷の流域内に帯状に分布している。これに対して、古期火山扇状地はその上流端が新期のものに被覆されているためにほぼ連続して下流側に位置し、標高200ｍ以下の分布が主である。新期山麓扇状地内に小丘状に点在したり湯舟川－鳴沢川間のように河間丘陵の分布を示したり



第 3 図　遺跡周辺の等高線図



第 4 図　遺跡周辺の地形分類図

など、扇状地面の側方浸食が著しく開析度がきわめて大きい。面の勾配は新期のものよりかなり小さいものと思われる。

ところで、図１の等高線図によると、標高400～500ｍを扇頂部とする扇状地にあっては標高160ｍ程までは等高線がほぼ等間隔で分布している。扇状地の東方においては標高160～40ｍまでの等高線が大きく入り組み、また比高90ｍ以下の円錐形の等高線の発達が十腰内及び十面沢を中心として認められる。津軽平野寄りの標高40ｍ以下の等高線は緩く平坦な地形がうかがわれる。一部、比高10ｍ程の小丘地が末端に認められる。

図２は、遺跡周辺の地形分類を示したものである。これによると、遺跡周辺は十面沢円頂丘群が点在していて、これを被覆するように古期山麓扇状地が発達している。ちょうど、古期山麓扇状地を構成する堆積物から十面沢円頂丘群が多島海のように顔を出している感じである。この丘陵地をなす古期山麓扇状地は、本遺跡の北西方に立地する湯舟遺跡付近の丘陵地（標高88.0ｍ）及び長平北方の和開（標高190ｍ）などにおいて確認したところによると、亜角礫～亜円礫（安山岩質）を包含する厚さ10ｍ以上の凝灰質砂礫及び凝灰質粘土等の堆積物で構成され、その扇状地性堆積物が赤褐色ローム（厚さ２～３ｍ）から成る中部火山灰層に被覆されている。なお、古期山麓扇状地周縁には中位段丘に相当する山田野段丘が発達し、同じく中部火山灰層が段丘面を被覆している。山田野段丘の末端部には比高10ｍ程、直径300ｍ未満の古期山麓扇状地からなる小丘地が点在している。一方、新期山麓扇状地は上部火山灰層（後述の基本層序Ⅳ層）に覆われ、Ⅳ層直下には暗色帯が付随している。この扇状地の構成物としては本遺跡及び大平野(5)遺跡などで確認したところ、暗色帯直下にレンズ状の砂礫層を含む黄灰色ないし青灰色粘土等が認められる。大石川流域には小規模ながら火砕流堆積物からなる台地が認められる。この地形は平野縁辺部に断片的に分布するものであって、弘前市街地にも見られる。火砕物中の炭化した樹幹の年代測定では37,000年以上の数値が得られている（山口，1993）。

本遺跡は十面沢集落の北方約500ｍにあって、小丘状に点在する古期山麓扇状地面上（標高80～85ｍ）に立地している。西方には十面沢円頂丘群の一つと思われる比高約40ｍの円錐状の小丘が位置している。なお、本遺跡の東西両端には廻堰大溜池に注ぐ支谷が流れていて、その流域の古期山麓扇状地を浸食した傾斜地には新期の山麓扇状地が帯状に分布している。

次に、調査区域内の基本層序について記述する（図３）。なお、森田(5)遺跡南端の谷地形の層序をみると、レンズ状の礫層を含む黄灰色粘土を主体とする現在の氾濫による堆積物が認められる。

Ⅰ層　黒褐色土（10YR2/3）　厚さ10～20㎝。耕作土である。粘性・湿性がない。かたさは多少見られるが締まりがなく脆い。耕作土であるため下位層とはシャープな面で接している。なお、森田(5)遺跡調査区域南端の斜面低地（Ｃ～Ｄライン）においては本層

下位に暗褐色ないし黄褐色ローム質の砂質粘土がレンズ状に堆積していて、間層として取り扱った。この間層中には下位層の浮石粒（Ⅳ層相当、径２～５㎜大）、ロームブロック（径２～30㎜大）及び円礫（径30㎜以下）が含まれ、特にロームブロックが多量に混入する所では黄褐色を呈している。全体的には淘汰不良であって、増水等による水成堆積物と考えられる。

Ⅱ層　黒褐色腐植質土（10YR2/2）　平地での厚さは平均10～20㎝であるが、斜面低地では20～30㎝と厚くなっている。粘性・湿性がある。かたさ及び締まりがやや認められる。本層は森田(5)遺跡調査区域の斜面低地（Ｈライン以東）において２層に細分され、下部のⅡｂ層は湿性が強くやや粘土質となっている。

Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/3）　厚さ10～20㎝。漸移層である。本層は下位層の混入状況によって細分できる。上部のⅢａ層はかたさ及び締まりがあって、約10㎝と平均的な厚さをもつ。全体的に色調が暗く黒褐色を呈し、浮石粒（Ⅳ層）の混入が目立つ。下部のⅢｂ層は下位層のブロック状の混入が目立ち色調が明るい。Ⅲｂ層はブロック状の堆積が多く、このためⅣ層との境界面は凹凸のある面で接している。

Ⅳ層　明黄褐色ラピリ質浮石（10YR6/8）　平均的な厚さは10～20㎝であるが、森田(4)遺跡調査区域中央部クラインでは60～80㎝の厚さを確認している。非常に緻密堅固で、乾くとクラックの発達が見られる。本層は上部火山灰層に相当し、直下には暗色帯を伴い下位の火山灰層との境界面となっている。ところで、クラインでは本層が３層に細分された。上部のⅣａ層はかたさ及び締まりに欠けソフトな感じであって、中部のⅣｂ層の風成再堆積相と思われる。中部のⅣｂ層は一時的な堆積物と思われ、緻密堅固で黄白色浮石（径２～10㎜）の混入が目立つ。下部のⅣｃ層は黄灰色粘土質浮石層で、厚さ２～３㎜の酸化帯を２～３枚有し水成堆積相を示している。この分層は本層降下時の水の影響によるものと思われる。

Ⅴ層　黄褐色ローム（10YR5/6）　厚さ10～40㎝。上部火山灰層直下は暗色帯であり、上位層との間には時間間隙が認められる。本層は２層に細分され、上部のⅤａ層は平均10㎝の厚さをもつクラックの発達した暗色帯である。下部のⅤｂ層は局部的な堆積物であって、マンガン粒を多量に混入する粘土質な火山灰層である。なお、Ⅴｂ層以下は基本的には赤褐色を呈する粘土質火山灰層であって、中部火山灰層に相当する。

Ⅵ層　黄褐色ローム（10YR5/8）　厚さ20～60㎝。粘土質なハードロームである。

Ⅶ層　明黄褐色ローム（10YR6/6）　厚さ０～20㎝。緻密堅固で粘土質なロームである。暗色帯の様相を呈し、クラックが認められる。

Ⅷ層　褐色ローム（10YR4/4）　厚さ20㎝以上。やや赤みを帯びていて、緻密堅固な粘土質

なローム である。本遺跡東方の小丘地ではⅧ 層下位に亜角礫～亜円礫の安山岩礫を有する粘土質なローム層が堆積し、古期山麓扇状地を構成する堆積物の一部と思われる。

参考・引用文献

大　沢　　穠　1961　５万分の１地質図幅「弘前」（青森―第28号）同説明書　地質調査所

一色直記・大沢　穠　1967　岩木火山北東麓の泥流丘群　火山．Vol.2.No12－3

中　川　久　夫　1972　青森県の第四系　青森県の地質　青森県

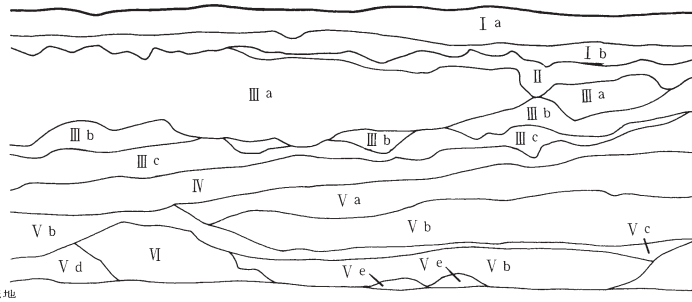
鈴　木　隆　介　1972　岩木山の変位　地理学評論45号

青森県教育委員会　1989　杢沢遺跡　県埋文報第130号

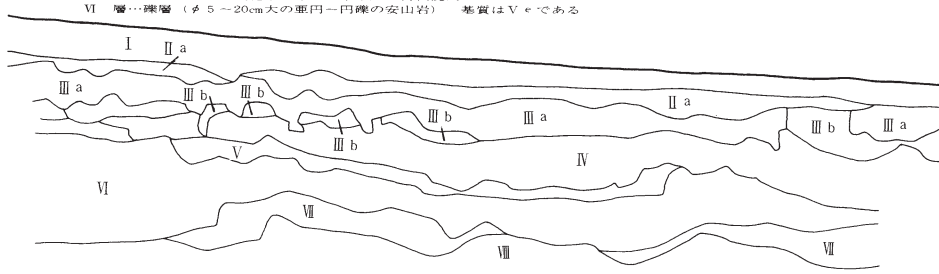
弘前市教育委員会　1991　砂沢遺跡発掘調査報告書―本文編―

青森県教育委員会　1992　鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡　県埋文報第142号

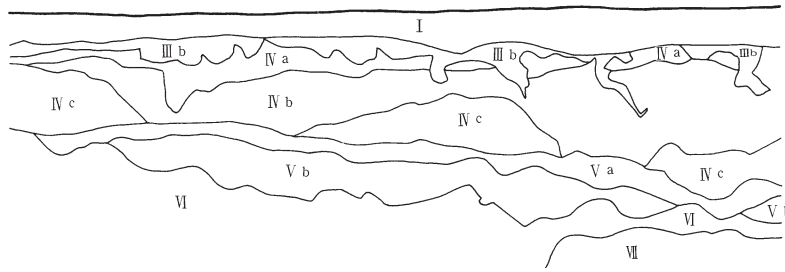
山　口　義　伸　1993　平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について　年報　市史ひろさき2



森田(5)底地
Ⅰa層…粘性・湿性あり　しまりなくもろい　ローム粒目立つ
Ⅰb層…攪乱層で、下位のⅡ層のブロック（φ5～50mm）が多量に混入する　粘性・湿性あり　ややしまりもある
Ⅱ　層…やや細粒砂質の浮石質粘土である　Ⅲa層との境界部に1－3cm巾の酸化層を伴う　Ⅱ層以下再堆積層
Ⅲa層…浮石質の細－中粒砂質粘土でⅡ層より砂質が強い
Ⅲb層…細粒砂質の浮石質粘土
Ⅲc層…酸化層（非常にかたい）である　縞模様をなす　ところどころ円礫（φ5cm大）を伴う　上下に酸化層あり　中位に浮石質粘土を伴う
Ⅳ　層…粘土層（やや浮石質）でⅤaとの境界部に酸化層を伴う
Ⅴa層…青灰色粘土
Ⅴb層…泥炭質粘土　樹枝混入
Ⅴc層…泥炭層　樹枝挿入
Ⅴd層…Ⅴaに同じ
Ⅴe層…Ⅴbに同じ　炭化不十分（生木？）の樹枝混入
Ⅵ　層…礫層（φ5～20cm大の亜円－円礫の安山岩）　基質はⅤeである



森田(5)台地
Ⅰ　層…10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　表土・耕作土
Ⅱa層…10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　黒石腐植質土　かたさ・しまりあり（Ⅱbは斜面に存在）
漸移層
Ⅲa層…10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりあり　黒可色土　ローム粒・Ⅳ層の粒子が混入
Ⅲb層…10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし　しまりあり　Ⅳ層のブロック状混入
Ⅳ　層…10YR6/8　明黄褐色土　粘性なし　しまり強い　黄灰色ラピリ質浮石　かたくしまっている
地山
Ⅴ　層…10YR5/6　黄褐色土　粘性あり　しまりあり　淡灰褐色ローム（暗色帯）
Ⅵ　層…10YR5/8　黄褐色土　粘性あり　しまりあり　黄褐色ローム
Ⅶ　層…10YR6/6　明黄褐色土　粘性あり　しまり強い　灰褐色ローム（暗色帯）
Ⅷ　層…10YR4/4　褐色土　粘性あり　しまりあり　赤褐色ローム



森田(4)
Ⅰ　10YR2/1　表土・耕作土
Ⅲb　10YR3/3　暗褐色度　Ⅳ層のブロック混入
Ⅳa　明黄褐色　風成再堆積相を示す　しまりなくもろい
Ⅳb　明黄褐色　緻密・堅固　パーミス（φ1－3mm）が帯状に堆積（水成物？）
Ⅳc　オリーブ黄　粘土質浮石（ソフト）　Mn粒（φ1－3mm）が帯状に堆積（水成物？）
Ⅴa　5YR5/4　ハードローム（粘土質）（暗色帯）
Ⅴb　5YR5/2　ハードローム（粘土質）（暗色帯）ブロック状の存在　Mn粒（φ2～5mm）多量に混入
Ⅵ　7.5YR5/6　ハードローム
Ⅶ　7.5YR5/3　粘土質ハードローム（緻密・堅固）
㊟Ⅳb層（明黄褐色ラピリ質浮石）が本来的な降下堆積層であるが、上位のⅣa層は堆積後の風成再堆積を示し、下位のⅣc層は水の影響を受けた堆積層を示す。Ⅳcは白色粒子（Pm粒子？）が目立つ。Ⅱ－Ⅲa層は耕作により削平される

第5図　遺跡土層図

第２節　周辺の遺跡

本遺跡は岩木山の裾野に拡がる丘陵地に位置している。周辺には昭和33年から４年間に渡って実施された岩木山古代遺跡緊急発掘調査で調査された遺跡も数多く所在する。

大森勝山遺跡は、縄文時代晩期初頭の大型住居跡、環状列石が検出された。遺物は、縄文時代前期末～晩期の土器・土製品、石器、石製品などが出土している。

手白森遺跡は、縄文時代前期の遺物散布地である。

尾上山遺跡は、13基のピットが検出されており、うち全面に敷石がなされたもの１基、焼けた屋根材と思われる木材が出土したピットが１基である。縄文時代晩期の土器が出土している。

鬼沢猿沢遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、焼土などが検出された。中心となるのは後期末葉と考えられる。遺物は後・晩期の土器・石器が出土している。

常夜森遺跡は縄文時代晩期の遺物散布地である。

猿沢(1)遺跡は、縄文時代前・後・晩期の遺物散布地である。

猿沢(2)遺跡は、縄文時代後・晩期、平安時代の遺物散布地である。

十腰内遺跡は、東北北部の縄文時代後期十腰内式土器の標識遺跡。10～14ｍ規模の列石が検出されている。猪形土製品の他、土器・石器など多数出土している。

甕子山遺跡は、縄文時代晩期の遺物散布地である。

清水森遺跡は、縄文時代の遺物散布地である。

砂沢遺跡は、弥生時代前期の水田跡６枚と水路が検出されている。水田跡は不整長方形状に区画されている。土器・石器・石製品・土製品などが出土している。

（田澤　賢治）

第Ⅳ章　森田(4)遺跡

第１節　検出遺構と出土遺物

調査区東側が耕作等でかなり削平を受けていたこともあり、遺構は土坑が３基検出されたにすぎなかった。

１　土　坑

第１号土坑（第６図・図版１）

[位　　置] タ－31・32グリッドに位置する。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。長軸100㎝、短軸81㎝、深さ４㎝を計測するが上部はかなり削平を受けており、全容を窺うことはできない。

[壁・底面] 壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆　積　土] 堆積土は２層に分層される。

[出土遺物] 底面から少量の炭化物が検出されている。

第２号土坑（第６図・図版１）

[位　　置] ネ－34グリッドに位置する。

[平面形・規模] 平面形は長円形を呈する。長軸168㎝、短軸80㎝、深さ15㎝を計測する。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は凹凸している。

[堆　積　土] 堆積土は２層に分層される。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

第３号土坑（第６図・図版１）

[位　　置] コ－24グリッドに位置する。

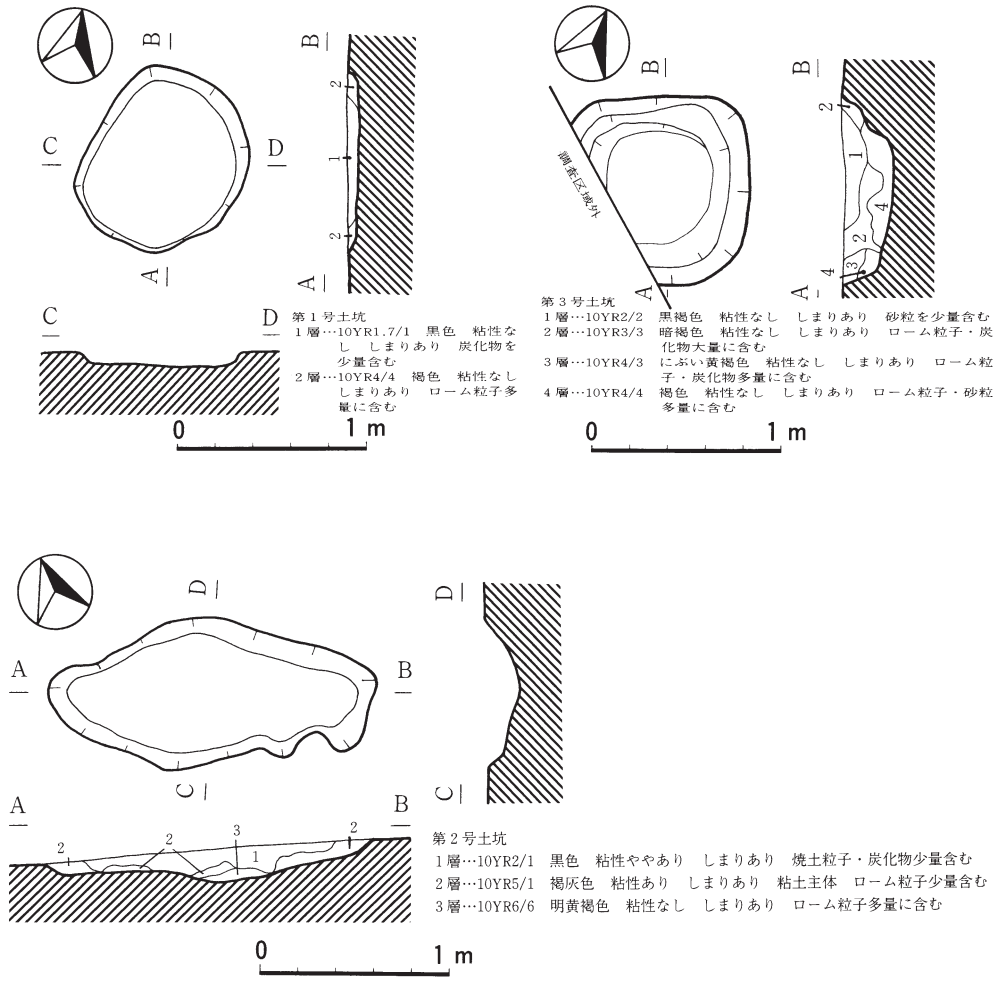
[平面形・規模] 一部調査区域外にかかるが平面形は円形を呈するものと思われる。推定長軸102㎝、深さ26㎝を計測する。

[壁・底面] 壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は平坦であるが、中段にテラスを有する。

[堆　積　土] 堆積土は３層に分層される。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

（笹森　一朗）



第６図　第１・２・３号土坑

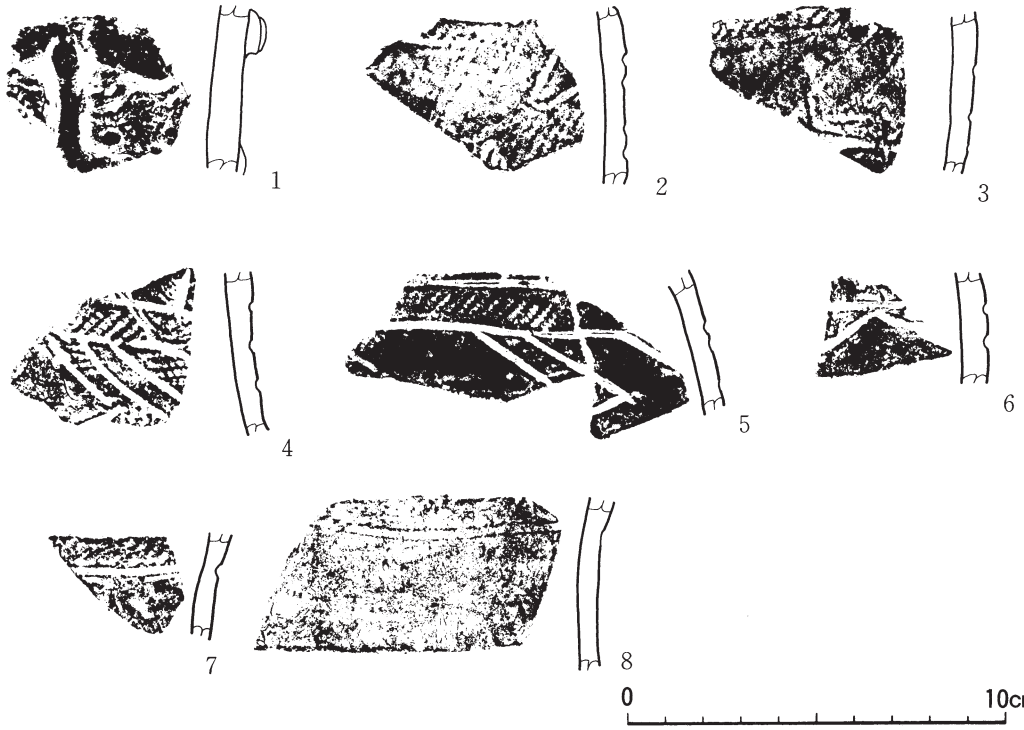
第２節　遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土は、段ボール箱にして１箱にすぎなかった。調査区北側の包含層中からの出土がほとんどで、縄文時代中・後期の土器片、石器が出土している。

１　土　器（第７図・図版２）

１は胴部片。粘度紐の貼付けによる隆起線文が施文される。２～７は同一個体で全て胴部片。沈線区画による磨消縄文帯を形成する。８も胴部片。地文無文に横位の沈線を施文する。

（笹森　一朗）

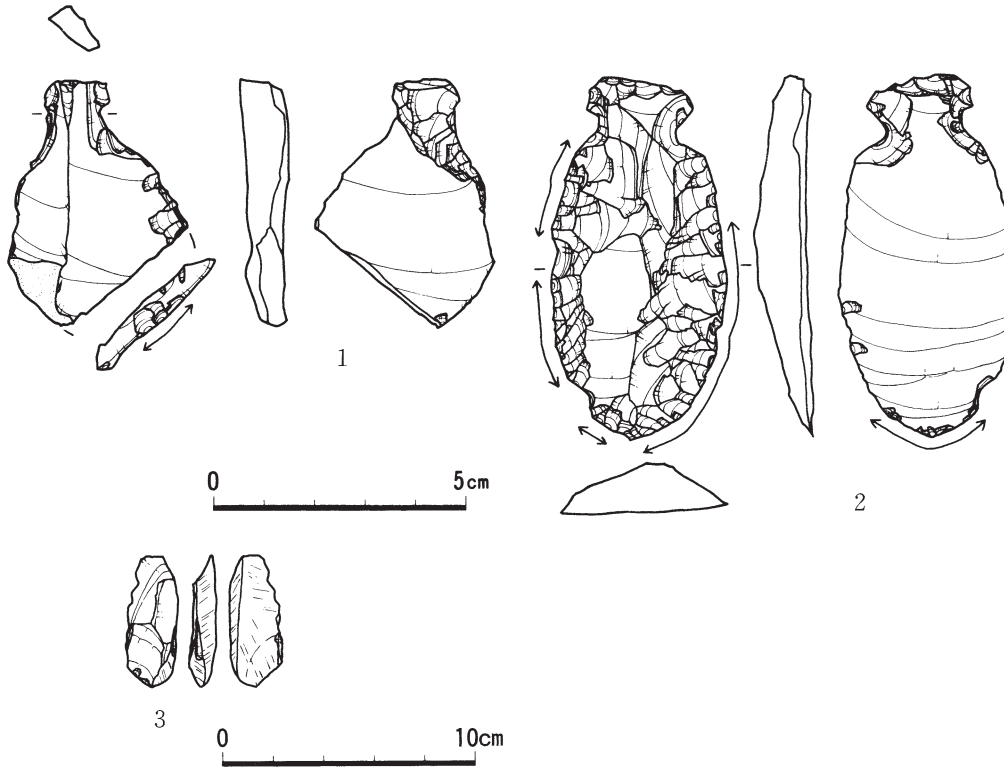


第７図　遺構外出土遺物土器

2　石　器（第８図・図版４）

石器はすべて遺構外からの出土であり、石匙２点、磨製石斧の破片が１点の計３点である。剥片等他の石器は全く出土していない。

（斎藤　　岳）



第８図　遺構外出土石器

番号	分　類	出土地点	層　位	大　き　さ	重量（g）	石　質	備　考
1	石　匙	シ－26	Ⅰ・Ⅱ	(4.8)×(3.6)×1.0	(10.5)	珪質頁岩	
2	〃	ノ－36	Ⅱ	7.2 × 3.5 × 1.2	24.8	〃	
3	磨製石斧	ツ－30		(5.2)×(2.1)×(1.1)	(13.5)	緑色細粒凝灰岩	

第１表　石器観察表

第Ⅴ章　森田(5)遺跡

第１節　検出遺構と出土遺物

今回の調査では、土坑６基、掘立柱建物跡１棟が検出された。

１　土　坑

第１号土坑（第９・10図・図版１）

[位　　置] Ｉ－８グリッドに位置する。

[平面形・規模] 楕円形である。開口部で長軸142㎝、短軸120㎝、深さ32㎝を計測する。

[壁・底面] 底面は平坦である。壁は底面からやや急に立ち上がる。

[堆　積　土] 暗褐色土及び褐色土を主体とする。ローム粒がまだらに入り、人為的な堆積とみられる。覆土全体に炭化物粒子や焼土粒子を含んでいる。

[出土遺物] 黒曜石製の剝片・石核が22点出土し、10点を図示した。焼けているものは16点であり、特に４の焼け方は著しい。

両極剝離痕の残るものは10点、リングからみて両極打法の可能性のあるものは５点である。他に、炭化果皮（オニグルミ）が１点（0.3ｇ）出土している。

（斎藤　　岳）

第２号土坑（第11図・図版１）

[位　　置] Ｊ－６グリッドに位置する。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸174㎝、短軸60㎝、深さ30㎝を計測する。

[壁・底面] 底面は多少凹凸している。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆　積　土] 堆積土は３層に分層される。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

第３号土坑（第11図・図版２）

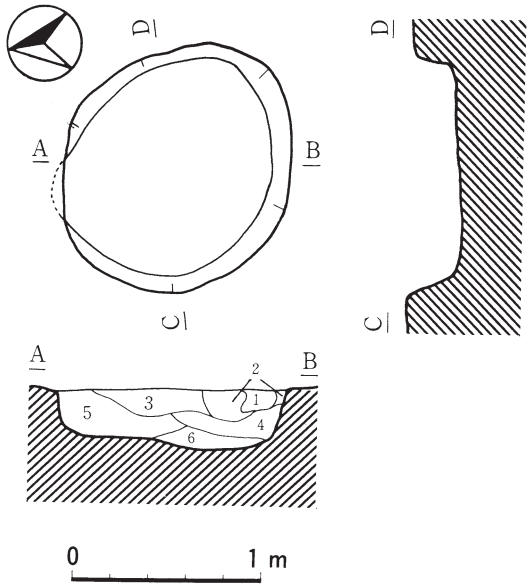
[位　　置] Ｊ－６・７グリッドに位置する。本土坑は第６号土坑と切り合い関係にあり、新旧関係は本土坑の方が旧い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、長径112㎝、短径97㎝、深さ８㎝を計測する。

[壁・底面] 底面は平坦で、中段にテラスを有する。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

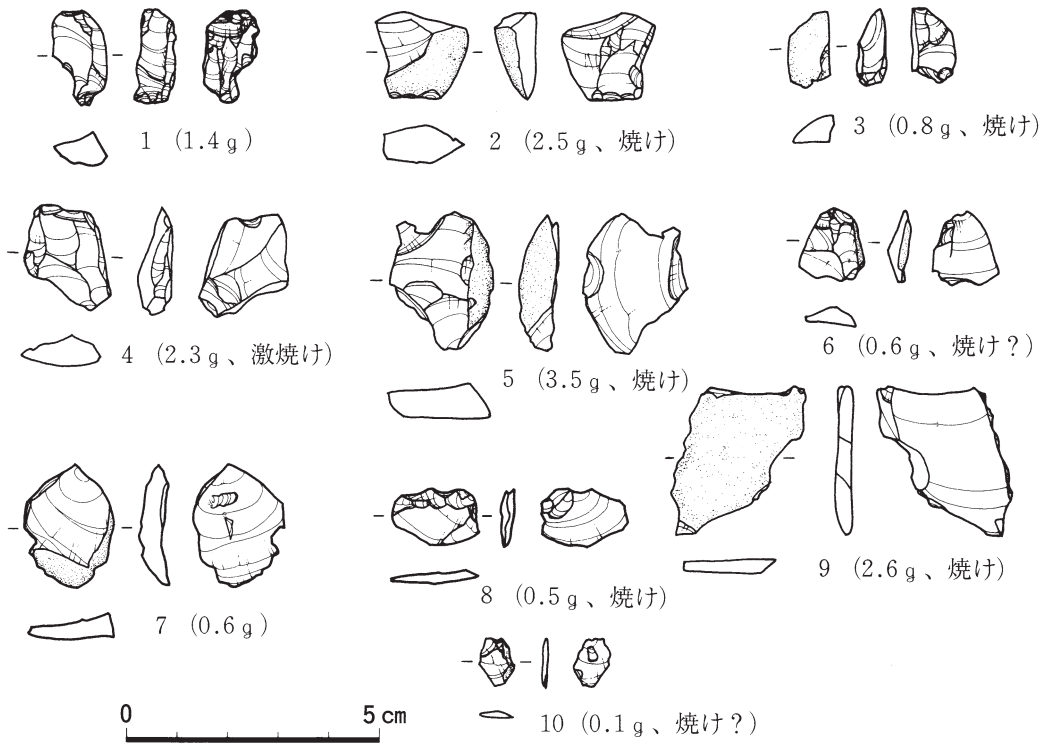
[堆　積　土] 堆積土は１層で自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。



第１号土坑
１層…10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　炭化物微量混入
２層…10YR2/3　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　ローム粒・炭化物微量混入
３層…10YR3/3　暗褐色土　粘性なし　しまりあり　ローム粒・炭化物・焼土粒微量混入
４層…10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり　しまりあり　ローム粒まだらに混入
５層…10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまりあり　炭化物、焼土粒微量混入　ロームブロックまだらに混入
６層…10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまりあり　炭化物少量混入　ロームブロック多量に混入

第９図　第１号土坑



第10図　第１号土坑出土遺物

第４号土坑（第11図・図版２）

［位　　置］Ｉ・Ｊ－６グリッドに位置する。

［平面形・規模］平面形は円形を呈する。長径72㎝、短径65㎝、深さ22㎝を計測する。

［壁・底面］底面は平坦である。壁は底面からやや急に立ち上がる。

［堆　積　土］堆積土は１層である。

［出土遺物］遺物は出土していない。

第５号土坑（第11図・図版２）

［位　　置］Ｕ－14グリッドに位置する。

［平面形・規模］平面形は不正円形を呈する。長軸241㎝、短軸99㎝、深さ49㎝を計測する。

［壁・底面］底面は凹凸している。壁は底面からやや急に立ち上がる。

［堆　積　土］堆積土は４層に分層される。人為的に埋め戻された可能性が高い。

［出土遺物］遺物は出土していない。

第６号土坑（第11図・図版２）

［位　　置］Ｊ－６・７グリッドに位置する。本土坑は第３号土坑と切り合い関係にあり、新旧関係は本土坑の方が新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形を呈する。推定長軸119㎝、短軸64㎝、深さ14㎝を計測する。

［壁・底面］底面はほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。

［堆　積　土］堆積土は６層に分層される。

［出土遺物］遺物は出土していない。

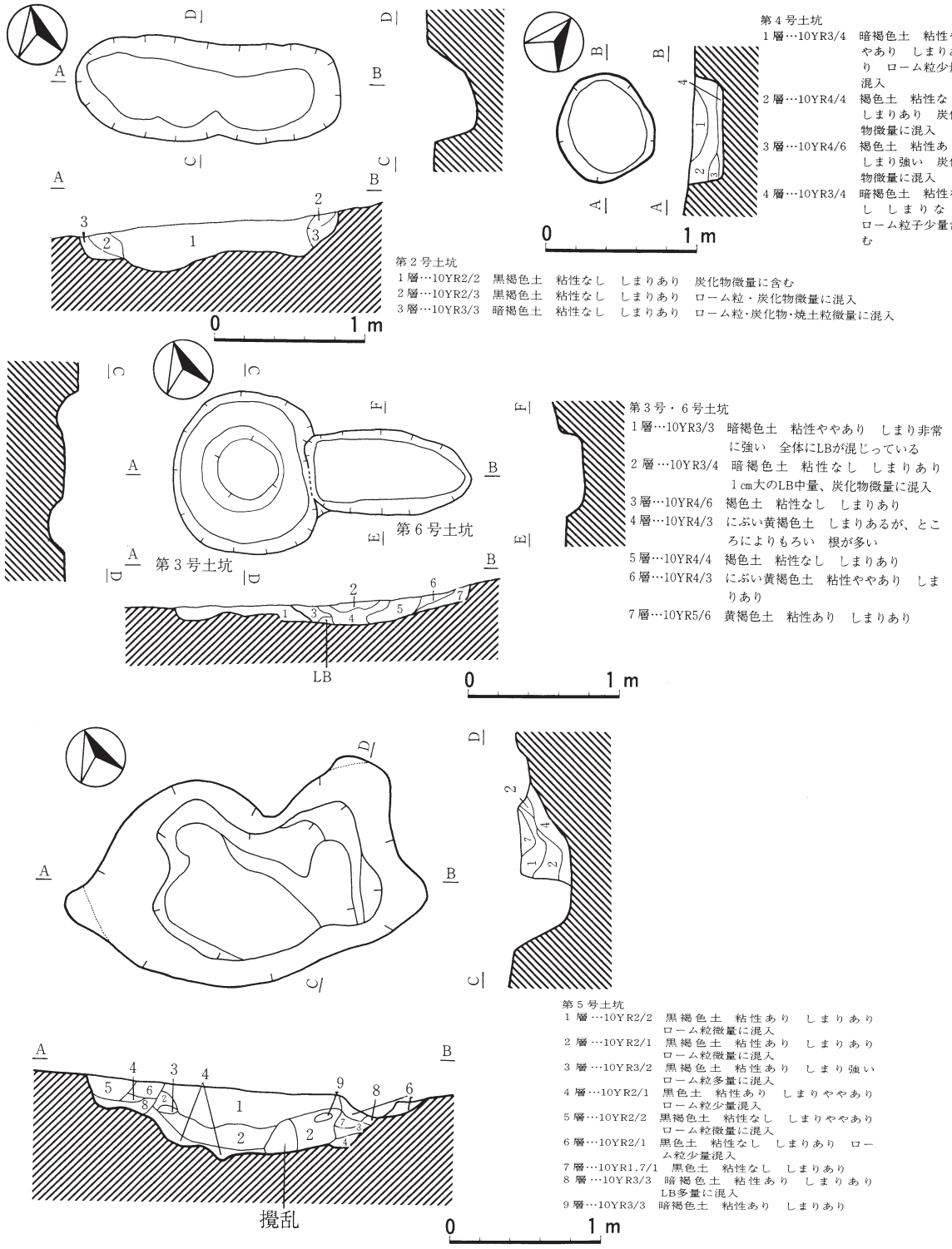
２　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第12図・図版２）

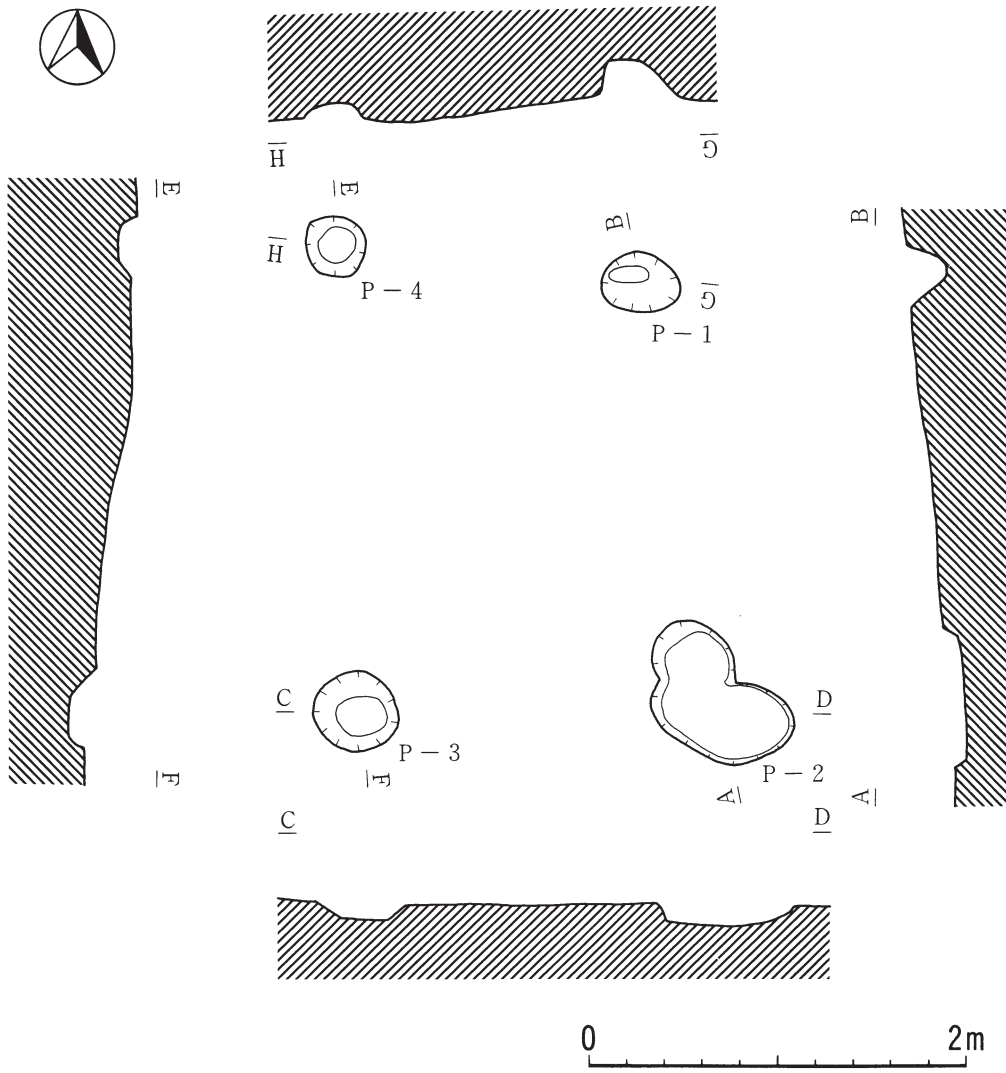
Ｒ－14グリッドに位置する。ピットは総数４個を検出した。形態は１間×１間の坪掘りによる側柱式の建物跡と考えられる。柱間は南北が2.5ｍ、東西が1.8ｍを計測し、柱列平面形は方形を呈する。ピットの規模は直径46～33㎝を計測し、確認面からの深さはP_1が13㎝、P_2が16㎝、P_3が10㎝、P_4が15㎝を計測する。

遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。

（笹森　一朗）



第11図　第2・3・4・5・6号土坑



第12図　掘立柱建物跡

第２節　遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土は、段ボール箱にして２箱分の土器・石器類が出土している。発掘調査で出土した土器は縄文時代後期の土器である。

１　土　器（第13図・図版３）

１、２は口縁部片。口唇部は平滑に仕上げられている。３も口縁部片。地文無文で、縦位の擦痕を有する。胎土には砂粒を多量に含む。４～11は胴部片。網目状撚糸文を施文する。１、２と同一個体と思われる。12～16も胴部片。沈線区画による磨消し帯を有する。19は深めの沈線区画を有する。20は底部片。底面に沈線を巡らし高台部を形成している。21は脚部片。下部に１条の沈線を巡らす。

（笹森　一朗）

２　石　器（第14～16図・図版４）

森田(5)遺跡では石器は石材により異なった出土状況を示している。黒曜石製の石器はＩ－７グリッドを中心に出土しているのに対し、その他の石材の石器は、出土点数が少なく遺跡全体から散漫に出土している（石器出土グリッドでも１グリッドから１点のみ)。珪質頁岩ではスクレイパーが３点、剥片が６点、石核が１点出土し、他に緑色細粒凝灰岩の磨製石斧破片が１点、擬灰岩の半円状偏平打製石器破片？が１点出土している（うち６点を図示)。

黒曜石製の石器は合計66点（うち１～21の21点を図示）であるが、次のような特色を持つ。

① グリッド・層位別出土状況は、Ｉ－５・Ⅰ層が６点、Ｈ－７・Ⅰ層が４点、Ｉ－７・Ⅰ層が51点、Ｊ－８・Ⅰ層が１点、Ｋ－８・Ⅰ～Ⅱ層が３点、Ｋ－９・Ⅲ層が１点である。

② 背面に礫皮を残すものが多い。(小さな原礫が多かったことによるか。良好な剥片が持ち去られた可能性あり)

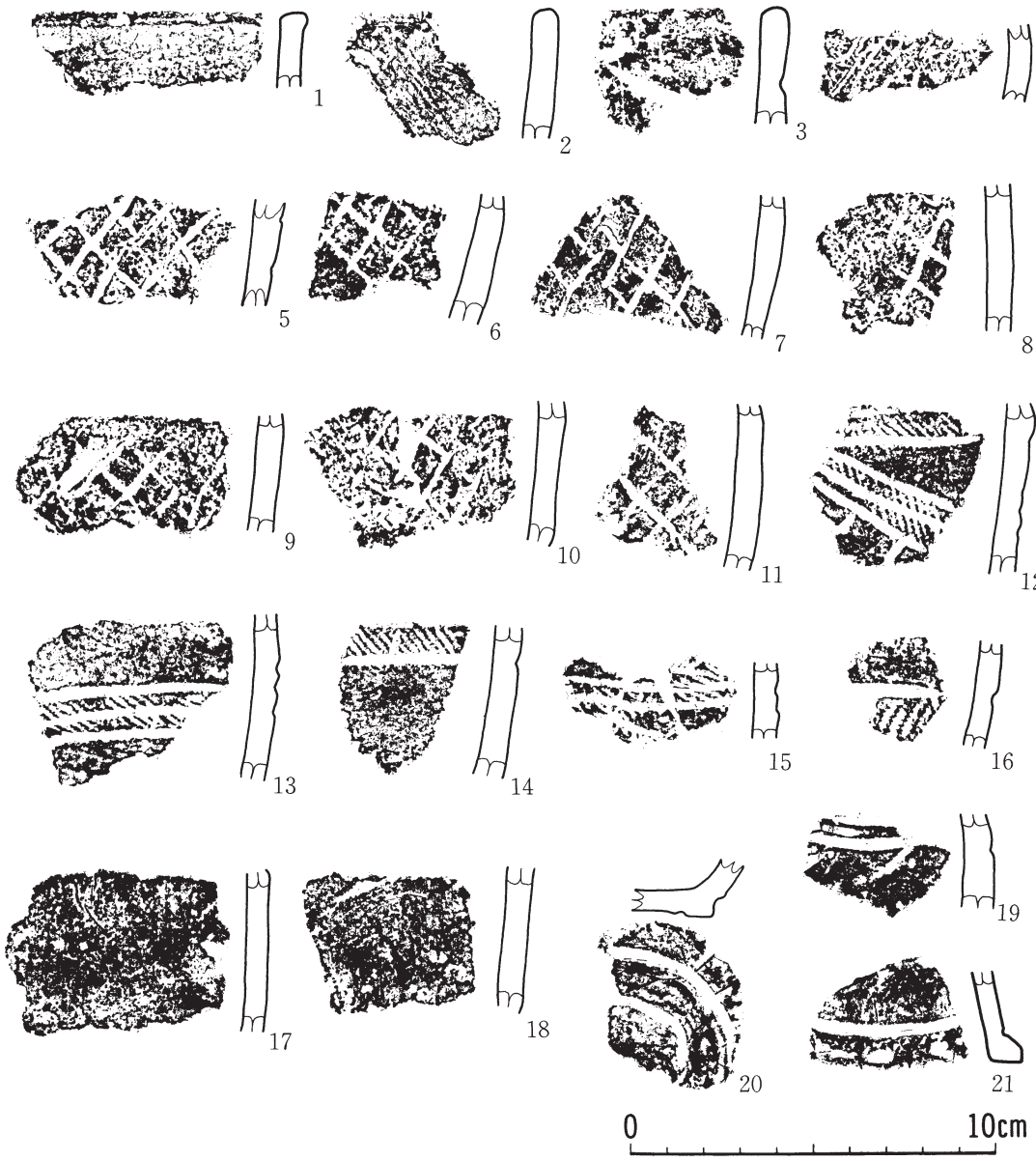
③ 両極打法の痕跡を残す石器が多いが、小破片等では両極打法なのか分からないものが多い。

④ 両極剥離痕のある石器は合計29点である。石核なのか剥片なのか、また、工具としてのピエス・エスキーユなのか明確に区別しがたいので両極剥離痕のある石器として一括した。

なお、石核か工具かの問題を保留したうえで、上下両端の形状・バルブ・厚みの観察により判断すると、より石核的なものが17点（うち、比較的四角形に近い整った形状で厚みのないものは５点である)、より剥片的なものが12点となる。

⑤ 両極剥離痕のある石器は、剥離の方向が一方向なものがほとんどである。

⑥ 両極剥離痕のある石器の他には、スクレイパー（１・２)、二次加工のある剥片（３・４)、



第13図　遺構外出土遺物土器

微細な剥離痕のある剥片（３点）、その他の剥片（29点）、小形の石核（１点）がある。

１・２は、ほぼ同一形態のスクレイパーであり、いずれも両極剥離痕のある石器を素材としていると考えられる。一方、３の素材は、両極打法ではない可能性が高い。

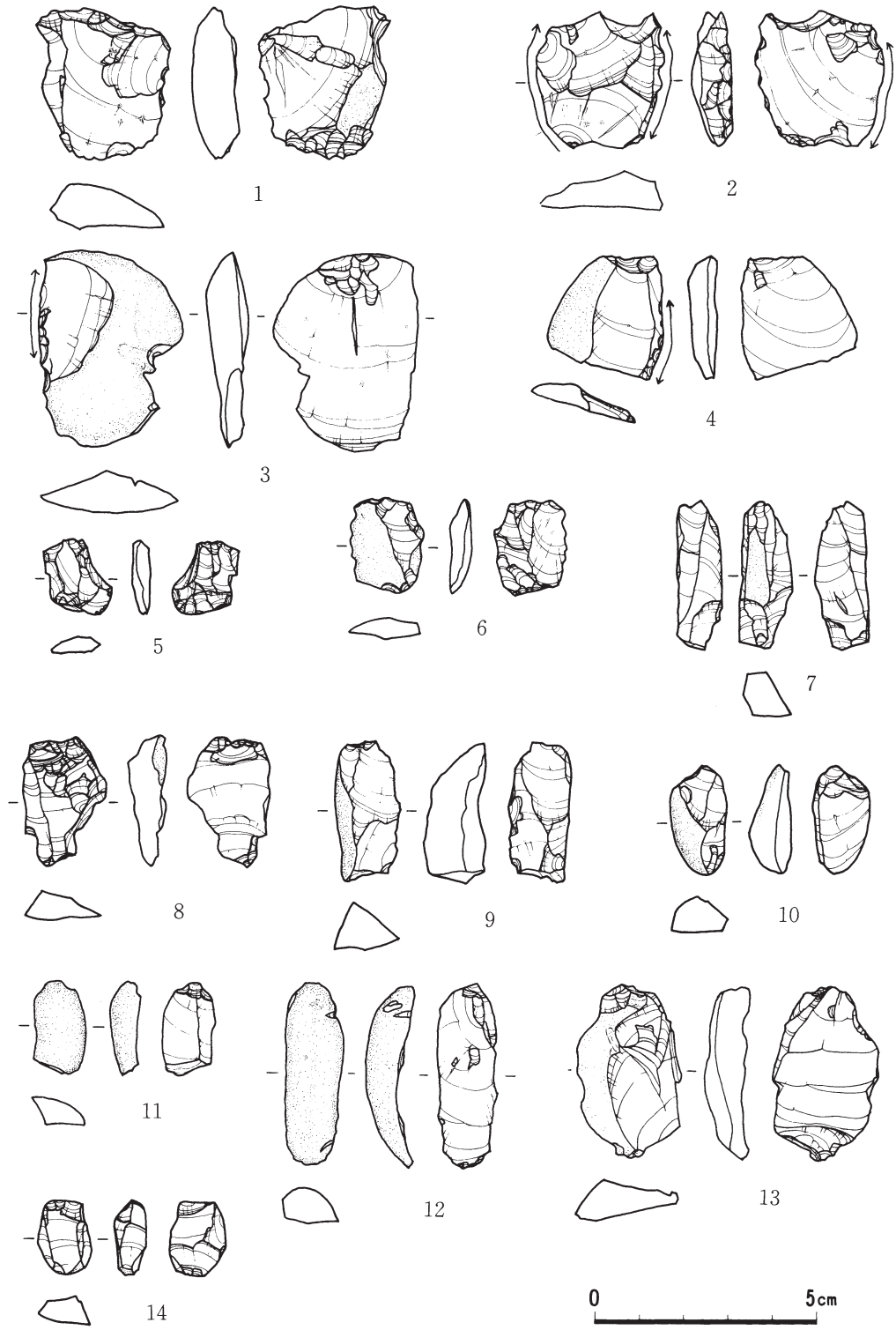
⑦　その他の剥片において、リング等からみて両極打法の可能性を示す石器は10点である。

⑧　焼けの認められるもの・可能性を示すものは16点（Ｉ－７：12点、Ｈ－７：３点、Ｉ－５：１点）で、焼けが認識できないものは50点である。

⑨　遺物取り上げ層位のほとんどは第Ⅰ層であるが、これはＩ－７グリッド等は黒色土が薄く、第Ⅰ層直下はすぐローム層への漸移層となっていることによる。

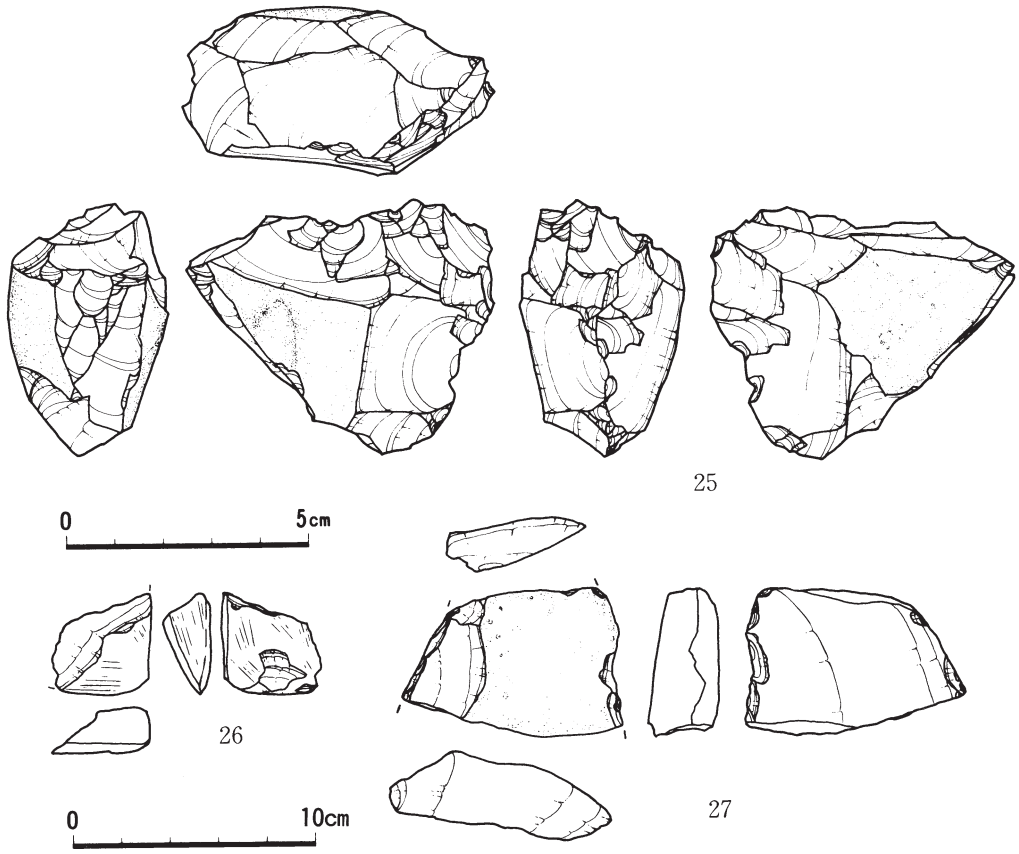
傾斜地の上部であるため土壌が流出して黒色土が薄い、あるいは耕作により削平されたという可能性が考えられるが、遺物は原位置から多少移動していると判断される。

（斎藤　　岳）



第14図　遺構外出土遺物石器(1)

第15図　遺構外出土遺物石器(2)



第16図　遺構外出土遺物石器(3)

番号	分　類	出土地点	層位	重量(g)	備　考	番号	分　類	出土地点	層位	重量(g)	備　考
1	スクレイパー	I－7	I	9.1		15	両極・剥離痕のある石器	I－7	I	7.8	
2	〃	H－7	I	7.8		16	剥　片	I－5	I	6.6	両極打法？
3	二次加工のある剥片	I－7	I	10.9		17	両極・剥離痕のある石器	I－7	I	0.9	
4	〃	I－5	I	4.8		18	〃	I－5	I	2.9	
5	両極・剥離痕のある石器	I－7	I	0.9		19	〃	I－5	I	1.9	
6	〃	I－7	I	1.7		20	剥　片	I－7	I	2.1	両極打法？
7	〃	I－7	I	4.2		21	両極・剥離痕のある石器	I－7	I	4.0	
8	〃	I－7	I	3.5		22	スクレイパー	G－3	I	48.2	
9	〃	K－8	I・II	5.1		23	〃	S－15	I・II	10.7	
10	〃	I－7	I	2.5		24	剥　片	Q－13	I・II	4.9	焼け
11	剥　片	I－7	I	1.9	両極打法？	25	石　核	G－5	I・II	93.4	
12	〃	I－7	I	5.5	〃	26	磨製石斧	N－10	I	32.7	
13	両極・剥離痕のある石器	J－8	I	7.6		27	半円状偏平打製石器？	L－8	I・II	187.0	
14	〃	H－7	I	1.5	焼け						

第２表　石器観察表

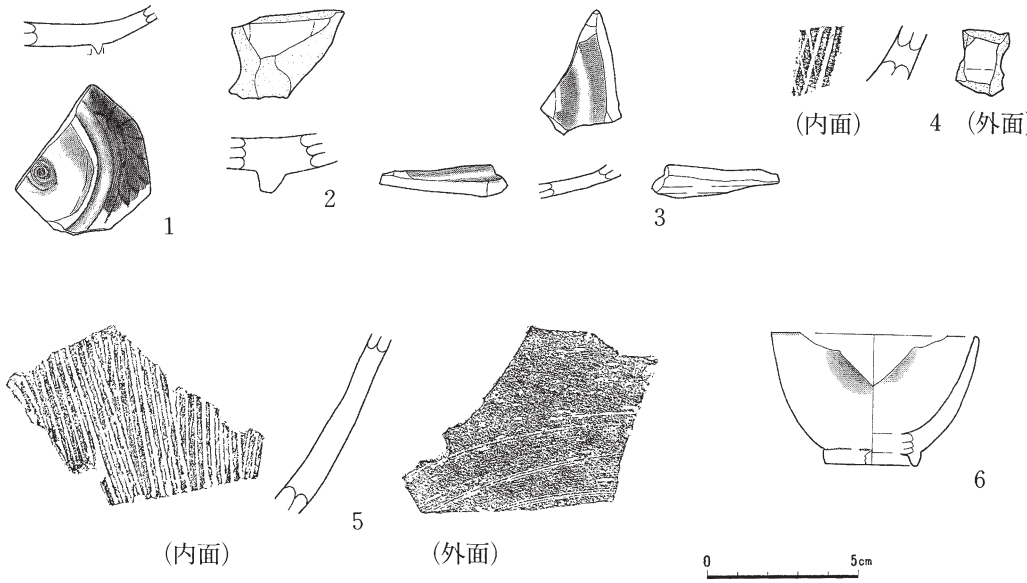
第３節　近世～現代の陶磁器

近世から現代にかけての陶磁器破片が54点出土している。総てⅠ層あるいはⅠ・Ⅱ層一括取り上げである。そのほとんどが８ラインから14ラインまでのグリッドで出土している。出土状況は散漫であり、小破片で、同一個体を持たないものが多い。二次被熱のものもある。

製作年代は、近世のものが７点、明治以降のものが30点、時期不明のもの（瓦器や鉢の細片）が17点である。うち６点を図示した。

明治以降のものでは、印判染付の碗や皿、他に甕や擂鉢などがある。戦時中に製作された陶器碗（高台内に岐47？の文字）も出土している。近世のもので紹介しなかった２点は、産地不明の擂鉢細片と肥前Ⅳ期のコンニャク印判五弁花文の皿の底部片である。

（斎藤　　岳）



第17図　遺構外出土遺物陶磁器

番号	出土地点	層　位	種別	口径・底径・器高	特　　徴
1	F－4	Ⅰ・Ⅱ	磁器		染付碗、肥前Ⅳ期高台内渦福銘
2	T－13	Ⅰ・Ⅱ	〃		碗、肥前Ⅲ～Ⅳ期蛇ノ目釉ハギ、被熱
3	N－9	Ⅰ・Ⅱ	陶器		皿、肥前Ⅳ期？内面は白化粧土によるハケ目
4	M－9	Ⅰ・Ⅱ	〃		鉄釉擂鉢、肥前Ⅳ期
5	P－11	Ⅰ・Ⅱ	〃		鉄釉擂鉢、産地不明、近世？
6	P－11	Ⅰ	磁器	(6.9) (3.1) 4.4	染付小杯、瀬戸、近代、口縁部赤錆

第３表　陶磁器観察表

第Ⅵ章　小　　結

第１号土坑と黒曜石の石器群について

Ⅰ－７周辺及び第１号土坑から出土した黒曜石の石器群は、どのような意味をもつのであろうか。第１号土坑出土遺物が焼けた石器の割合が高いことを除けば石器の形状・剥片剥離技法等両者は共通している。帰属時代については不明であり、取り上げも、詳細な検討を可能にするほど精密にはできなかったのであるが、まず、次のような解釈が考えられよう。

①　Ⅰ－７付近で剥片剥離・調整加工が行われ、主要な目的剥片やスクレイパー等が持ち去られた。その後、第１号土坑が造られ、一部石器がその覆土に混入した。

②　人為的堆積である第１号土坑を、墓坑とみなして黒曜石の石器を葬送儀礼に関したものととらえる。

剥片は、葬送儀礼の一要素となることがある（注１）。小形の両極石核は砕片や小形剥片を生産するためのものとすると、両極打法は、それに適した技法といえよう。スクレイパー、微細な剥離痕のある剥片等は葬儀のなかで使用された（食事用・なんらかの加工用）ものと解釈する。

石器の激しい焼けは、火にかかわる行為（火葬の可能性を含め）によって生じたと考える。

③　スクレイパー、ピエス・エスキーユ、微細な剥離痕のある剥片等によって何らかの加工が行われた。調査区内で加工に適した道具を作るための石器製作から行われ、不要な小剥片等を中心に現場に石器が遺棄され、加工品及び一部石器は、調査区域外へ持ちさられた。

そのいずれについても、以下の点において疑問が生ずる。

①については、小形の両極石核の解釈が問題となる。大きさからいって生産される剥片は利器とはなりえない。

②については、礫皮を持つ剥片の割合が多すぎることに対する整合性のある説明が難しい。

③については焼けた剥片と焼けていない剥片との関係・第１号土坑と遺構外の石器の関係について有意味な解釈ができない。（これは①についてもあてはまる）

第４の解釈を考えるか、①～③の解釈を補正する（単独の機能をもった場と考えない等）ことにより説明可能となるのかもしれない。

（注１）青森県教育委員会　1993　小奥戸(1)遺跡Ｐ137～139等。また、過去の調査例からみると黒曜石は、玉髄とともに墓とかかわりの深い石材であるように思われてならない。

（斎藤　　岳）

第Ⅶ章　ま　と　め

森田(4)遺跡は、調査以前は畑地であったが、グリッドの「エ」から「ニ」ラインにかけては、かなりの部分が削平を受けていることが判明した。検出された遺構は土坑が3基で、遺物のほとんどは包含層の堆積が認められる調査区西側から出土しているが、量的にはかなり少ない。以上のことから、本遺跡は、拠点的な遺跡ではなくハンティングキャンプ地的な性格を有した遺跡と考えられる。

森田(5)遺跡は、農道によって分断されているが、森田(4)遺跡とは同一の緩斜面上に位置し、調査以前は林檎畑となっていた。遺物は縄文時代後期の土器片が散漫に出土している。6基検出された土坑のなかでは、第1号土坑が土坑墓の様相を呈することから、本遺跡は墓域の一部と考えられる。しかし、土坑が検出された地点はかなり削平を受けており、遺存状態もそれほどよくはなかった。

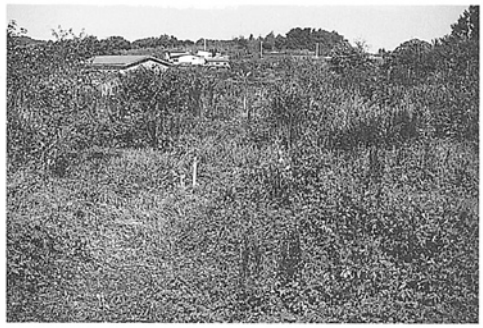
（笹森・斎藤）

引用・参考文献

岩木山刊行会　1968　『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』

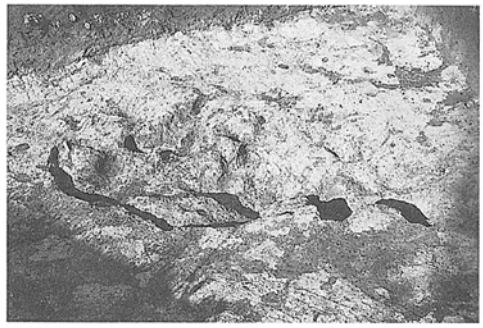
青森県教育委員会　1990　『杢沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第130集

写　真　図　版

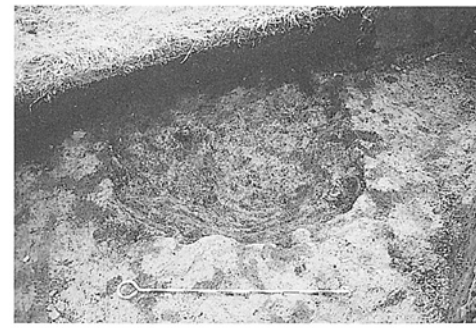


森田(4)遺跡近景

森田(4)第 1 号土坑



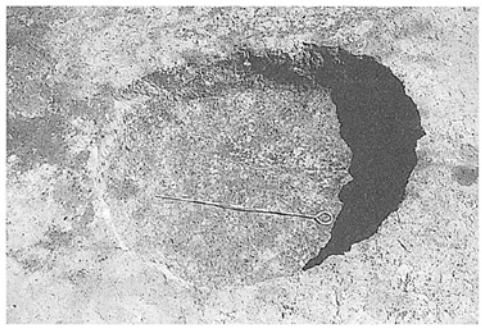
森田(4)第 2 号土坑



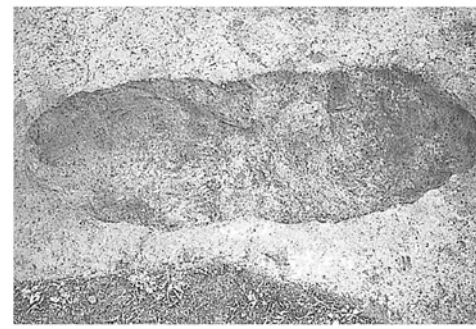
森田(4)第 3 号土坑

森田(4)遺物出土状況

森田(5)遺跡近景



森田(5)第 1 号土坑

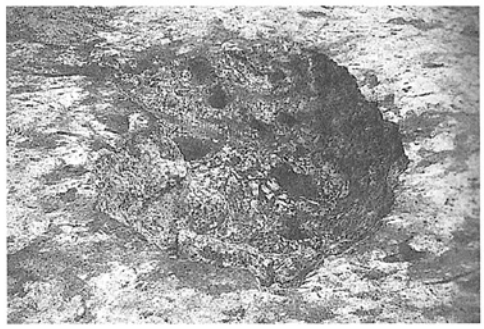


森田(5)第 2 号土坑

図版 1

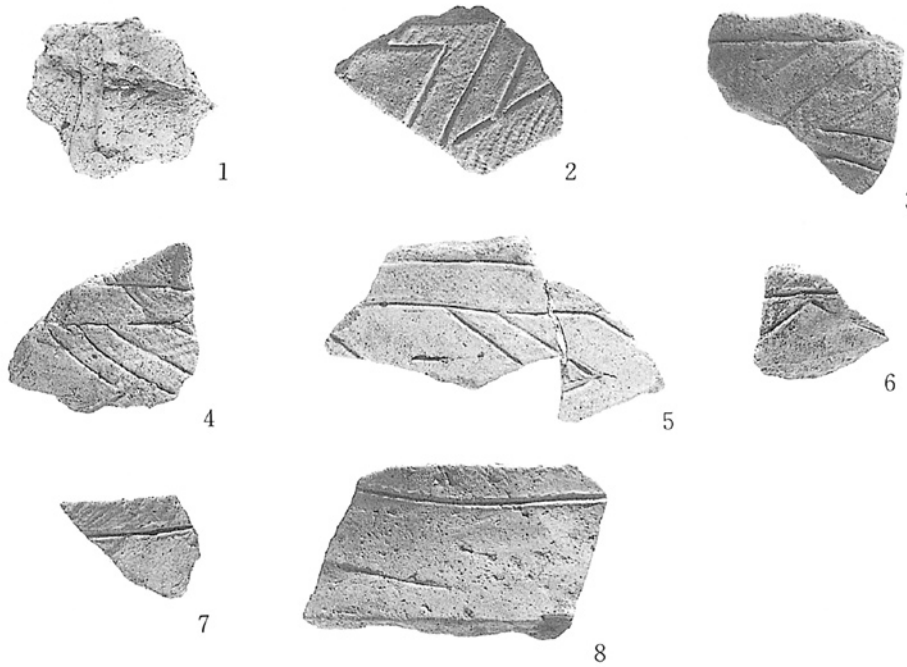
森田(5)第３・６号土坑

森田(5)第４号土坑

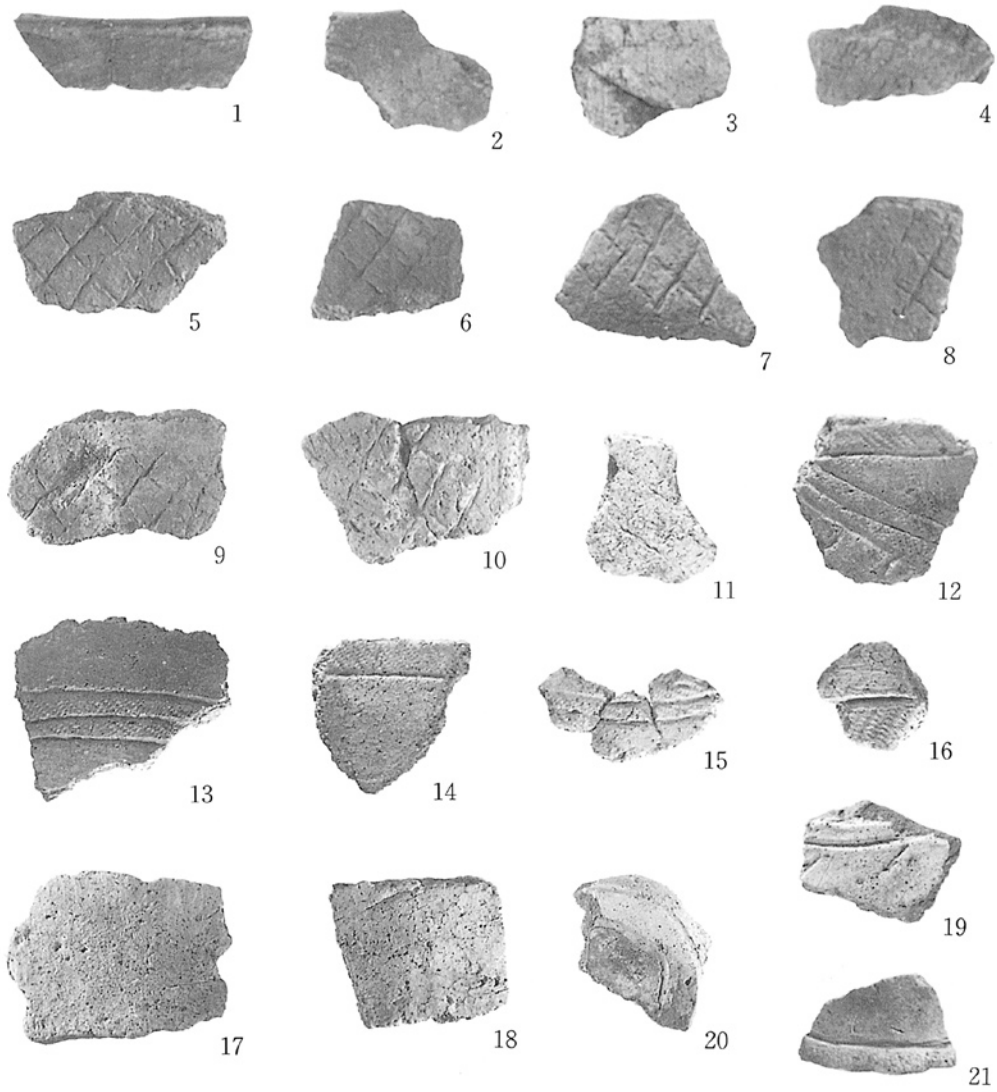


森田(5)第５号土坑

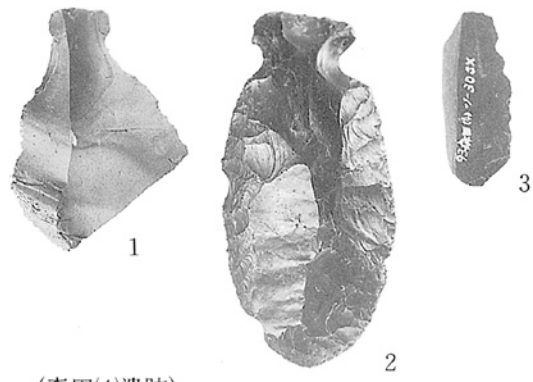
森田(5)第１号掘立柱建物跡



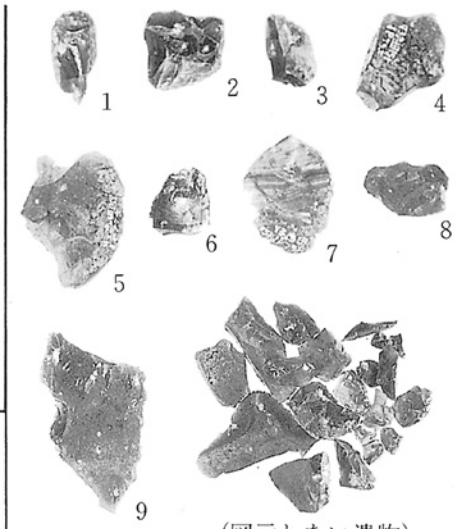
図版２



図版 3

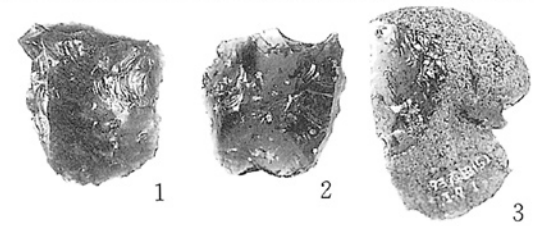


(森田(4)遺跡)

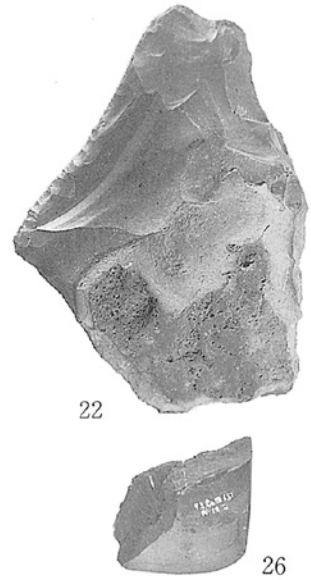


(図示しない遺物)

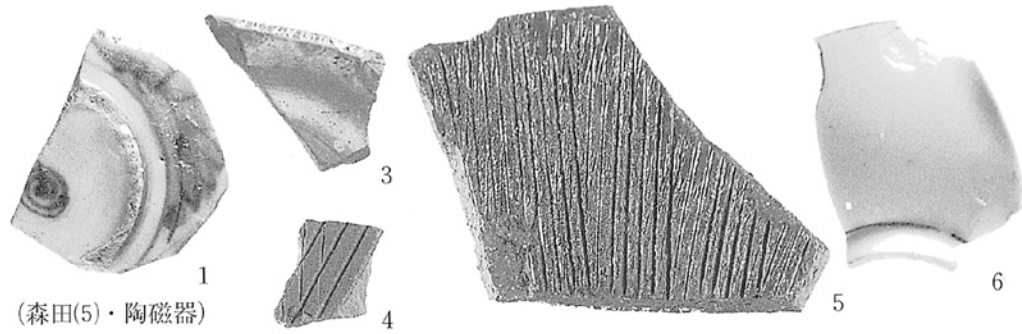
(森田(5)・1号土坑)



(図示しない黒曜石石器)



(森田(5)・遺構外出土石器)



(森田(5)・陶磁器)

図版 4

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もりた　4　5　いせき
書　　名	森　田　(4)・(5)　遺　跡
副　書　名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第176集
編 著 者 名	笹森一朗・斎藤　岳
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒038　青森市大字新城字天田内152－15　ＴＥＬ0177－88－5701
発 行 年 月 日	西暦1995年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
森　田　(4) もり　た	青森県弘前市大字十面沢字森田８－４外 あおもりけんひろさきしおおあざとつらざわあざもりた ほか	02202	02177	40° 43′ 50″	140° 21′ 6″	19931001 ～ 19931029	1,348	津軽中部広域農道建設に係る埋蔵文化財発掘調査
森　田　(5) もり　た	青森県弘前市大字十面沢字森田17－７外 あおもりけんひろさきしおおあざとつらざわあざもりた ほか	02202	02178	40° 43′ 47″	140° 21′ 10″	19930901 ～ 19930930	1,024	津軽中部広域農道建設に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特　記　事　項
森　田　(4)		縄　　文	土　坑　　３基	縄文土器 石器 炭化物	
森　田　(5)		縄　　文	土　坑　　６基 掘立柱建物跡　　１棟	縄文土器 黒曜石	

青森県埋蔵文化財調査報告書　第176集

森田(4)・(5)遺跡発掘調査報告書

―県営津軽地区広域農道整備事業に係る
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書―

発行年月日　平成７年３月31日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市大字新城字天田内152－15
ＴＥＬ　0177－88－5701
印 刷 所　東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目２－12
ＴＥＬ　0177－42－2221